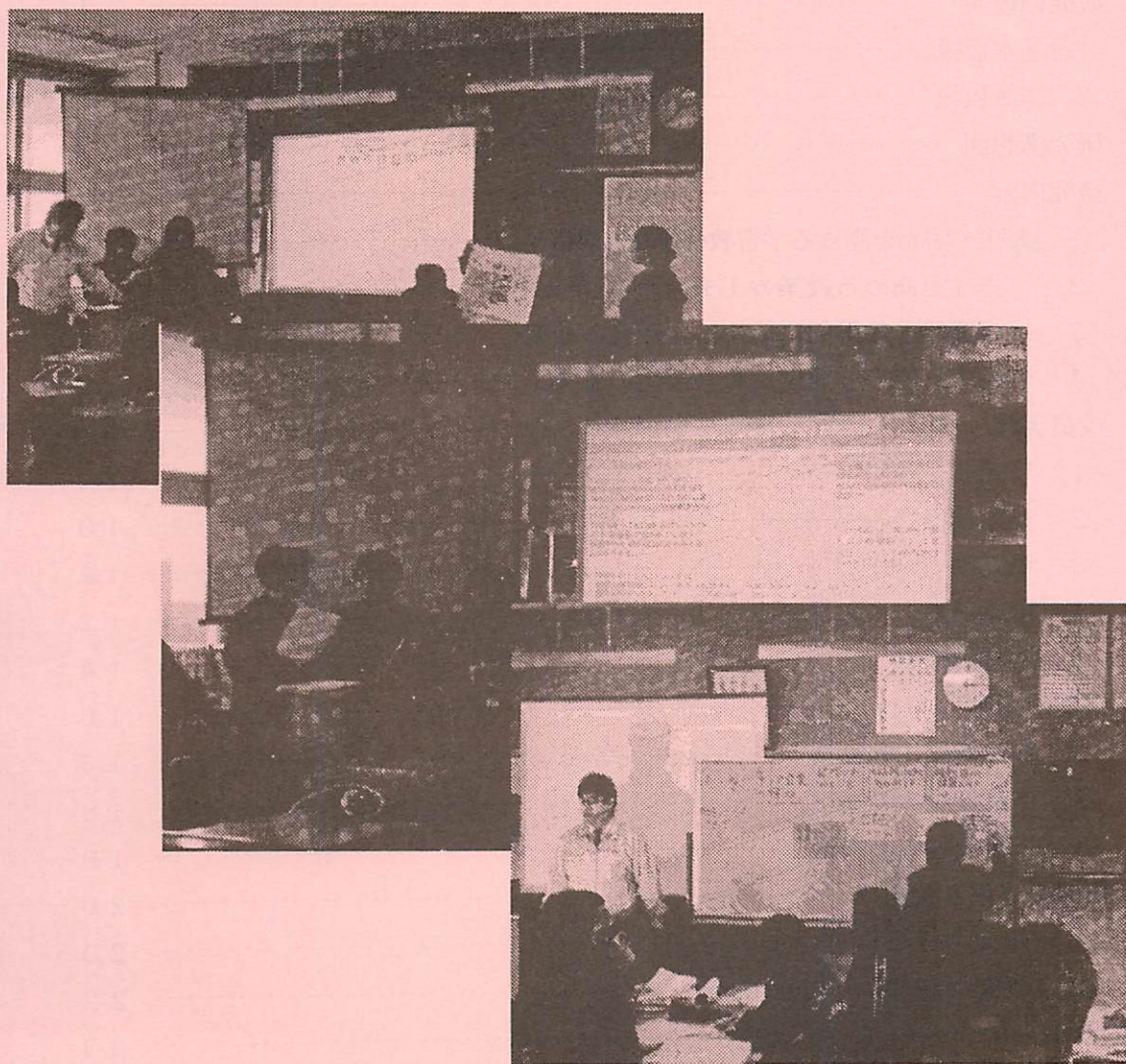


( 中 学 校 社 会 科 )

興味・関心と主体性を高める授業法の工夫

—情報機器を効果的に活用した歴史学習を通して—



浦添市立仲西中学校 與座 賢二



## 目次

I	テーマ設定の理由	1
II	目指す生徒像	1
III	研究の目標	1
IV	研究の仮説	1
	1 基本仮説	1
	2 作業仮説	2
v	研究構想図	2
VI	研究内容	2
	1 興味・関心を高める学習教材作りと活用	3
	2 主体性を高める授業の工夫	7
	3 情報機器を効果的に活用した授業の研究	8
	4 表現する能力と態度を育む授業の工夫	9
VII	授業実践	10
	1 単元名	10
	2 単元目標	10
	3 単元について	11
	4 指導計画	12
	5 本時の指導	14
VIII	研究の考察	16
	1 作業仮説1の検証	16
	2 作業仮説2の検証	18
	3 作業仮説3の検証	19
IX	研究の成果と課題	20
	1 研究の成果	20
	2 研究の課題	22
	おわりに	23
	主な参考・引用文献	23

# 興味、関心と主体性を高める授業法の工夫

—— 情報機器を効果的に活用した社会科学習を通して ——

浦添市立仲西中学校 與 座 賢 二

## 要約

情報機器を効果的に活用しながら、興味・関心を高める教材作りを通じて、生徒の主体性や表現力を高める授業法を工夫し、その変容と効果を検証していく研究である。

キーワード ◆ARCS理論 ◆web教材 ◆情報機器活用 ◆討論学習 ◆主体性

## I テーマ設定理由

今日、情報化・科学技術の進歩・グローバル化など社会が急速に変化している現状にあって、学習指導要領では、21世紀を展望した我が国の教育の在り方について「主体性を持った生徒の育成」を目指し、「体験的な学習や問題解決的な学習」「生徒の興味・関心を育み自主的・自発的な学習の工夫をすること」が求められている。

学習指導においても、社会の変化に適切に対応できる資質や能力を育成するためには、「自ら学び、課題を解決する力を育成すること」「自己の意見を持ち表現する力などを身につけること」が求められている。

また社会科学習指導要領の内容においても、「作業的・体験的な学習の充実」を図る事「コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器の活用を促す事」「主体的な学習活動を促し課題を解決する能力」を図ることなどが求められている。

歴史における指導内容には「ア我が国の歴史について、関心ある主題を設定し、まとめる作業的な活動を通して、時代の移り変わりに気付かせるとともに、歴史を学ぶ意欲を高める。」とある。

ところで、社会科に対する生徒の意識アンケート調査では、社会科に対する印象として暗記学習だと捉えている生徒が多くいた。

また、「社会科は好きですか」という質問に対して「とても好き」「まあまあ好き」と答えた生徒が、54%「普通」「あまり好きではない」「嫌い」46%と答えた生徒よりもわずかに多いだけで社会科は生徒にとって「興味・関心」が低い傾向にあるように感じる。

さらに、日々の授業実践から、生徒たちは学習活動において受動的に授業を受けている生徒も少なくない、それは「興味・関心」や学習力が高まらない一因となっている。

さらに「自ら進んで課題を調べ解決する事」や「資料の収集・処理・発表」が、あまり得意でない。歴史学習への「興味・関心」を高め、歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するには、「主体性を持ち、課題を調べ解決し、学び合い発表する事」が大切なことである。

生徒が自ら課題解決に必要な「資料の収集、処理や発表」活動を通じ、情報機器を効果的に活用して「表現する能力と態度」を身につける必要がある。そこで「興味・関心」や主体性を高める授業法の工夫が大切であるとの思いから、本テーマを設定した。

## II 目指す生徒像

主体的に課題を解決し、学び合い、表現できる生徒

## III 研究の目標

情報機器を効果的に活用した歴史の「学習教材づくりと活用」を通して「興味・関心」を持ち、主体的に課題解決する授業法を研究する。

## IV 研究仮説

### 1 基本仮説

歴史学習において「学習教材づくりと活用」面を工夫し「課題解決的学習」にグループ活動や共同作業を取り入れ、調べ解決し、学び合い発表する活動を導入した授業法を行うことにより「表現する能力と態度」が身につけ「興味・関心」や主体性を高められるであろう。

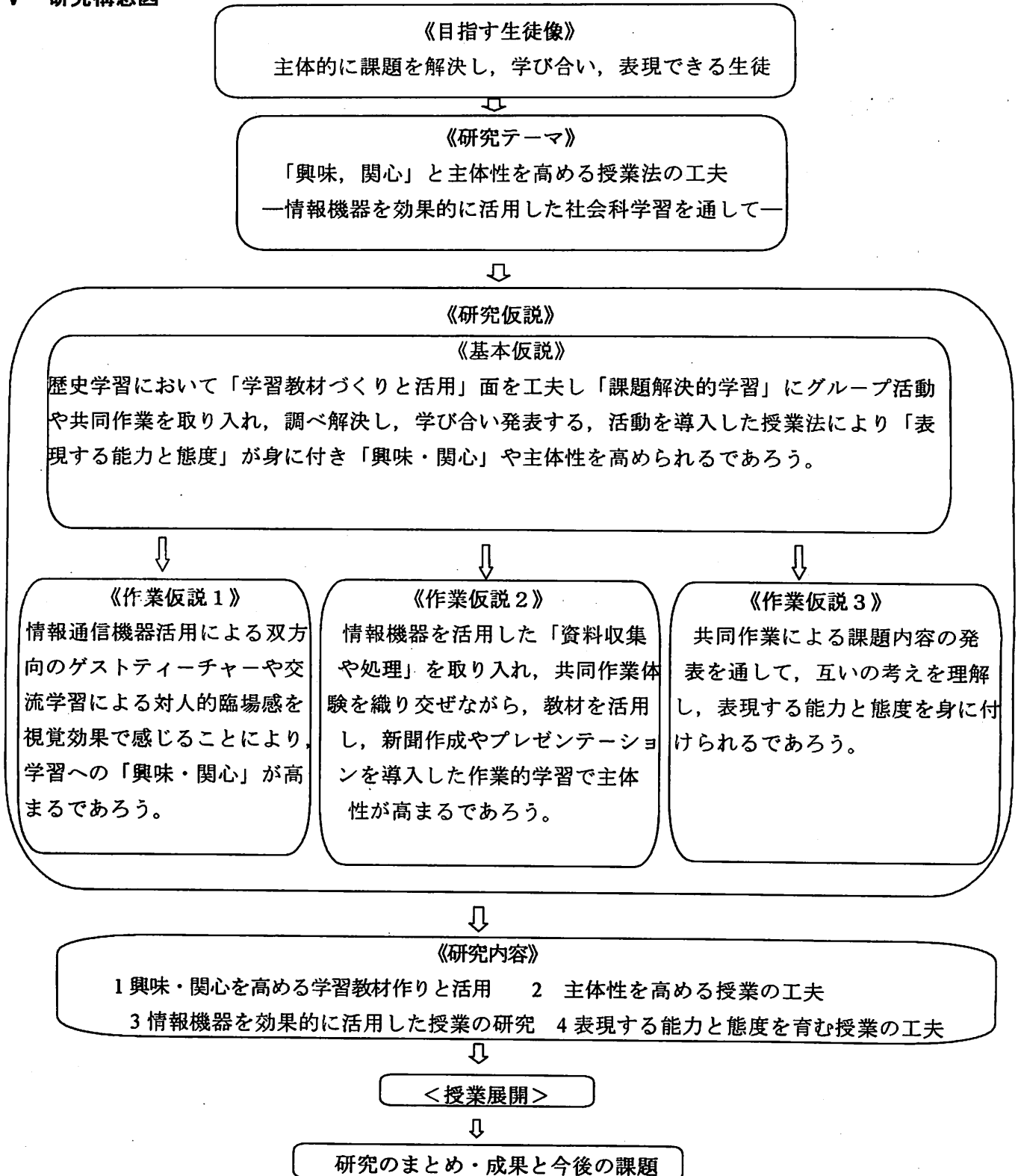
## 2 作業仮説

- (1) 情報通信機器活用による双方向のゲストティーチャーや交流学习による対人的臨場感を視覚効果で感じるにより、学習への「興味・関心」が高まるであろう。
- (2) 情報機器を活用した「資料収集や処理」を取

り入れ、共同作業体験を織り交ぜながら教材を活用し、新聞作成やプレゼンテーションを導入した作業的学習で主体性が高まるであろう。

- (3) 共同作業による課題内容の発表を通して、互いの考えを理解し、表現する能力と態度を身につけられるであろう。

## V 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 興味・関心を高める学習教材の作成と活用に関する研究

研究では、中学校社会科で地域学習に使用する Web 教材「Web 版社会科副読教材『大交易時代の沖縄』」を学習し、興味・関心の高め方理論として「動機付けモデルである ARCS モデル」を適用し作成を行う。授業実践を行う中で Web 教材を使用した学習は、生徒の学習への興味・関心を高める上で有効であることが予想される。

#### (1) 興味・関心を高める動機づけ理論を考える。

ここでは、ニューメディアを利用した学びである、アメリカの教育工学者ジョン・M・ケラーが提唱している「ARCS 動機づけモデル」を基に考える。このモデルは、学習への意欲に関する様々な分野での研究成果をまとめたもので、「やる気」がどこから来るのか、どうしたら「やる気」をひきだすことができるのかを考えるための枠組みとして便利である。「ARCS 動機づけモデル」を手がかりに、「興味・関心を高める授業の必要性」のなかで、〈授業の中にいろいろな情報機器を使うことの持つ意味〉を踏まえ、〈興味・関心を高めるといのはどういうことなのか〉を考える。そのための材料として、興味関心に関するモデルを紹介する。

ニューメディアに囲まれた生徒にとって学ぶ意欲がどんな意味をもつのかについてまとめる。

#### (2) 動機づけ研究の整理とARCSモデル

ケラーが求めたものは、「授業や教材を魅力あるものにするためのアイデアを整理する仕組み」である。これまで他の様々な分野の研究や実践報告の中には、「興味関心を高めるための作戦」がいろいろと提案されている中で、それらのアイデアを、これから授業の魅力高めよう、生徒の興味・関心を高める工夫をしようというときに「すぐに使える形にしたい」と考えた。そこで、ケラーは、これまでいろいろといわれてきた「興味関心を高める作戦」がどうして学習者の興味関心を高めることに成功し

たのだろうか、どんな意味で興味関心を高めたのだろうかといった点を一つ一つ吟味した。また、心理学やコミュニケーション研究などでこれまでに明らかにされてきた人間の動機づけについての理論を整理した。

その過程で、興味関心を高める手立てを4つの側面に分けて考えるのが便利だという結論に達した。その4つの側面とは、注意 (Attention)、関連性 (Relevance)、自信 (Confidence)、満足感 (Satisfaction) で、その頭文字をとってARCSモデル (アークスモデルと読む) と名づけられた (表1)。「やる気を出させるためにはどうしたらよいか」「勉強する意欲をもたせるためにはどうしたらよいか」とただ漠然と考えるより、「なぜやる気がでないのか」を4つの側面からチェックして、それに応じた作戦を立てると効果的ではないかという発想である。ARCSモデルにしたがって興味関心の要因をたどると、表1ようになる。

#### (3) ARCS動機づけモデル：学びへの意欲を4つに分けて考える

S満足感「やってよかったな」C自信「やればできそうだな」R関連性「やりがいがありそうだな」A注意「おもしろそうだな」表1 ARCS 動機づけモデルの4要因ARCSモデルの4側面の枠組みを使って、一般的にどのような学習環境が意欲を高めるかを整理すると表1ようになる。

表1に示してある特性の他にも、人が何かを学ぼうとする意欲のもとになるものがたくさんある。しかし、よく考えてみると、その他の特性も、〈注意〉〈関連性〉〈自信〉〈満足感〉の4つのどれかにあてはまることが多い。表1にでていないこと以外の特性や「やる気」を出させるための工夫も4側面に整理していきながら、学習指導案にARCSモデルに沿った内容に仕上げていくことにした。



表 1 興味・関心を高める工夫の分類

注意 A t t e n t i o n	〈面白そうだな〉 興味をそそられる話題、教材、 (郷土の資料) 調べてみたくなるきっかけ (郷土探求) バラエティーに富む場面展開、 教室の移動、博物館見学 珍しい機器の導入、 パソコンソフト使用、テレビ電話 集中できることしている
関連性 R e l e v a n c e	〈やりがいがありそうだな〉 役立ちそうだ 操作してみたいな 郷土のことみたいだよ 利用活用の方法の例示
自信 C o n f i d e n c e	〈やればできそうだな〉 班員で工夫して取り組む 操作や作成できそうだ ネットや図書館で調べられそう にする
満足感 S a t i s f a c t i o n	〈やってよかった〉 やってよかった よい作品ができてうれしい 発表ががうまくいって良かった テレビ電話での交流学習で意見 を交わす

以上がARCS理論の内容である。

『教育の情報化』により新しい学習環境が整備されている中で、この環境を生かした教材の作成と活用を考える。インターネットやイントラネット上で情報のやりとりをする仕組みを活用した、Web教材を活用する学習もその一つである。これからは新しい学習環境に適応した地域学習用教材の作成や学習の在り方について、問われることになると考えられる。

社会科では地域学習を行うため、地域独自の教材開発が必要になってくる。

そこで地域独自のWeb教材「Web版社会科副読教材」「大交易時代の沖縄」の教材作成を通して、生徒の興味関心が高まると考えWeb教材の作成と活用の在り方を考えた。

#### (4) web版社会科副読教材の作成

##### ① 意識調査

仲西中学校の1学年の2クラスの生徒を対象に社会科の学習に関する意識調査を選択式及び記述式により実施した。

調査結果から社会科の学習全体に対する設問

「社会科の学習は好きですか」に対して、「好き」「どちらかといえば好き」と回答している生徒は、両クラスとも過半数に達している、これらの生徒のほとんどが、「見学」や「調査」「体験」などを好きな学習活動として挙げている。

表現活動に対する設問「社会科で調べたことや学習したことをまとめるのは好きですか」「社会科で調べたことや学習したことを発表することは好きですか」に対しては、「きれい」「どちらかといえばきれい」と回答した生徒がどちらも過半数を超える結果となった。どの項目についても二つのクラスで同じような傾向を示す結果となった。

またこの結果から、観察や調査・見学、体験などの学習活動には意欲的に取り組むことができるが、これらの活動に基づいて分かったことや考えたことなどを、まとめたり発表したりする学習活動を苦手としている生徒が多いことが分かった。

#### (5) web版社会科副読教材作成の基本的な考え方

社会科副読教材の現状及び意識調査を踏まえ、インターネットというメディアの持つ特性を生かし、現行の紙媒体である社会科副読教材やすでに公開されているデジタル化された社会科副読教材にはない工夫を取り入れていくことにした。(図1Web版社会科副読教材参照)

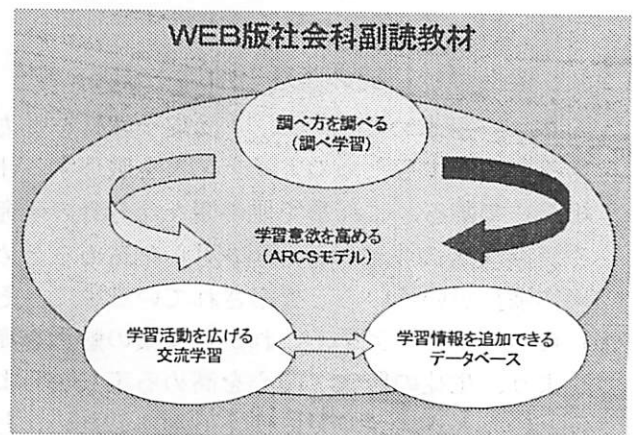


図 1 web版社会科副読教材の基本的考え方

### ① 学習に対する意欲を高める

アンケート結果から学習への興味・関心を持続させるような手だてが必要になってくる。

そこで、ケラーの提唱する ARCS モデルを用い、学習への興味・関心を高める工夫を Web 版社会科副読教材『大交易時代の沖縄』に、適用し ARCS モデルによる興味・関心を高める工夫を取り入れる。

### ② 学習活動に広がりを持たせる

単一クラス内だけの学習では得ることができない効果を得られることができるようにするため、Web 教材の特性を生かした電子掲示板を設け、校内の別クラスが交流することができるようにする。

Web 教材を利用して交流することにより、自分たちの考えやそのクラスだけで調べた考えだけをまとめた場合と異なり、校内の他のクラスの情報も収集することができるなど効果が大きい。また、同じ単元で校内の複数のクラスが同時期に地域学習を進めた場合、その結果を共有することで、生徒たちに多様な考え方やまとめ方があることに気付かせることができる。

### ③ 調べ方やまとめ方を学べるようにする

学習指導要領解説社会編では「学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的学習など生徒の主体的な学習をいっそう重視する」「生徒が観察や調査・見学・体験等の具体的な活動に基づいて、多様な表現活動を展開できるようにすることが大切である。」と述べられており、これにより地域の事象に対しての問題解決的な学習や生徒自身による調べ学習が重要になってくる。

しかし、現行の社会科副読教材には「調べ方」などと項目を立てて調べ方だけを学習する単元はない。

そこで、課題解決に向けて、自分で調べ追究していくにはどうすればよいのか、どこで調べればよいかなど、調べ方を身に付けられるようなページを組み込む。また、調べたことを表現するための具体的な方法を例示する。

### ④ 学習情報を追加できるようにする

現行の社会科副読教材では、急な改訂や情報の追加は難しい。Web 版社会科副読教材では、生徒が学習した成果を新たな学習情報として追加できるようにする。例えば、学習を進めて

いくうちに、Web 版社会科副読教材には載っていない資料を生徒が探してきた場合、その資料を Web 版社会科副読教材に追加すれば、生徒が共有し、すぐに利用することができるようになる。また、生徒の学習成果を追加し、ネットワーク上に公開することで、校内外のすべての生徒がまとめ方や調べ方などを参考として活用できるようになる。

このように Web 版社会科副読教材は、生徒によって新しい学習情報を追加していくことで、年度を重ねるごとに充実していくようになる。

### (6) web 版社会科副読教材の構成

Web 版社会科副読教材の全体構成は、基本的な考え方に沿って、「提示用資料のページ」「調べ学習のページ」「交流のページ」「学習のまとめと発表のページ」の四つのページで構成した(図2)。ARCS モデルを適用した箇所を前記表1の記号(ARCS 等)によって略記し、四つのページの工夫を以下に述べる。

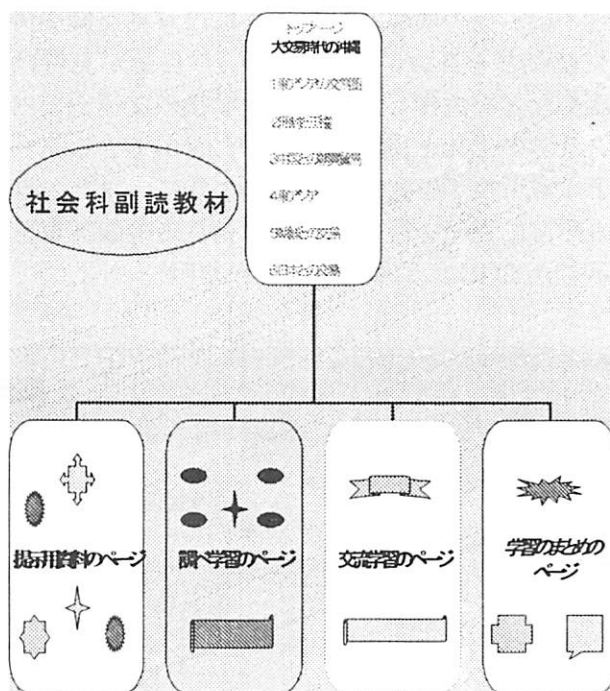


図2 Web版社会科副読教材の構成図例

#### ① 提示用資料のページ

導入や情報の提示に使用することを目的とするこのページは、教材の内容が分かるように表紙を工夫し、生徒の注意を喚起するようにオープニングに写真やアニメーションを多数使用する(A)。アニメーション作成には、題材に配

慮していく。また、文章による事象の詳しい説明はしないで、疑問を投げ掛けたり、生徒の興味を引き付けるような表現を取り入れたりする(A)。

② 調べ学習のページ

それぞれの学習課題に対する追究方法を学習することを目的としたこのページは、取材・見学・コンピュータ・本による情報収集の具体的な方法を例示する。例えば、取材やインタビューをするにしても相手が遠くにいる場合は、手紙や電話、ファクシミリといった方法があることや図書館の利用の仕方などを例示する(R)。また、学習内容に直結した Web ページを集約したリンク集と子ども用検索エンジンである「キッズ goo」「ヤフーキッズ」へリンクしたページも用意し、インターネットを使って調べたいと思っている生徒が実際に調べられる(C)ようにする。そして、自分たちが学習に利用した Web ページをリンク集に登録することもできるようにし、他の生徒も学習に利用できるようにする。

③ 交流のページ

ネットワーク上の Web 版社会科副読教材には、電子掲示板の機能が組み込まれ、意見交換や情報交換などを自由に行ったり(C)、自分が見つけた画像などを添付したりして、学級の友達や校内各クラスの生徒と交流を進めることができるページとする。相手を意識しやすいように、また、自分の発言に責任を持てるように発言者の顔写真を表示できる(R)ようにする。(図3参照)

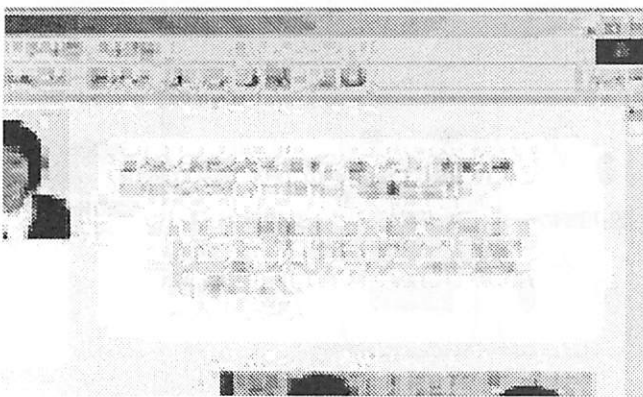


図3 顔写真を表示できる電子掲示板例

④ 学習のまとめと発表のページ

生徒が学習したことをまとめ、ネットワーク上に公開する(S)ページとする。校内の生徒やクラスの友達の学習のまとめをネットワーク上で閲覧し、参考資料としても活用できるものとする。

参考資料として活用しやすいように項目やキーワードで検索ができ、クラスごとやグループごとに学習のまとめが表示できるようにする。

⑤ システム構成

Web 版社会科副読教材の作成は、わいわいレコーダー、コラボノート、等のソフトを仲西中学校内のサーバーに設置するようになる。(図4参照)

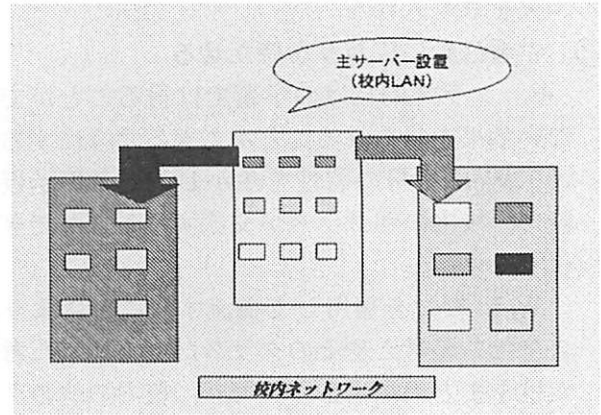


図 4 システム構成図

校内のサーバーに設置することで、ネットワークに接続されたパソコンとブラウザさえあれば、校内のどのクラスの教室からでも利用することができるようになった。また、CGI を利用した電子掲示板、データベースを使用した学習が可能となる。

そして、Web 版社会科副読教材の追加作業も、ネットワークを利用した共同作業が可能になる。

(7) 授業実践

① 授業の概要

ア 単元:第3章武家政治と東アジア(琉球とアイヌがになう東アジアの交易に関連した「大交易時代の沖縄」)

- 1 事前学習, オリエンテーション
- 2 事前学習, 東アジア交易圏, 冊封と王権
- 3 事前学習, 中国との朝貢貿易, 東南アジア
- 4 事前学習, 朝鮮との交易, 日本との交易
- 5 見学学習, 博物館
- 6, 7 事後学習, 討論作成活動
- 8, 9 事後学習, 発表とまとめ

イ 学習指導計画

学習指導計画には、郷土教材「大交易時代の沖縄」の事前学習からはじめ、見学学習から、



まとめと発表のまでの学習に提示する。

Web 版社会科副読教材を利用した授業は、生徒が6グループに分かれ、大交易時代の沖繩やそれに関連する内容について調べたことを基にまとめていく段階から行う。

Web 版社会科副読教材の「交流のページ」「学習のまとめと発表のページ」が持つ機能を利用することで、まとめを校内別クラスの生徒に見てもらおうという目的が明確になることにより、学習のまとめを作ることに對する意欲が高まることをねらっている。

また、校内別クラスの生徒とまとめについて情報交換をすることで、自分たちが調べていなかったことや自分たちとは違う、まとめ方や工夫を知ることによって、学習の理解が深まることをねらっている。

## ② 自己紹介

「交流のページ」にグループごとの専用電子掲示板を用意した。この専用電子掲示板を利用してグループごとに意見交換を行なう。

両クラスともインターネットを利用した交流学習は初めての試みであるため、電子掲示板の使い方を学習し、グループごとにあいさつや自己紹介を電子掲示板に書き込むことから始める。

## ③ 学習のまとめと発表の交流

それぞれのクラスで取り組んだ課題をグループごとに新聞形式やワークシートなどにまとめる。相手クラスの生徒に見てもらおうことを意識しながらの作業を行なう。これら紙媒体に生徒がまとめたものをデジタル化し、「学習のまとめの発表ページ」に取り込んでいく。新聞形式のものはデジタルカメラを使用し、1枚の画像として取り込む。その、まとめを作るときに気を付けた点、工夫した点などを一緒に書き込む。ワークシート内容については音声リンクによる説明が必要な場合はテレビ電話スカイプを使用しワークシート内容と発表の様子をビデオに取り込む。

## ④ 成果の相互評価

「学習のまとめ発表のページ」に取り込まれたお互いのまとめを見て、よいところや工夫している点、初めて知ったことなどを電子掲示板にグループごとに書き込んでいく。

## 2 主体性を高める授業の工夫について

### (1) 主体性について

国際化が進む社会で求められるのは、世界的規模の視野から物事を考え、世界のために貢献しようとする態度と考える。それを支える資質として、主体性を高めることが必要であると考える。

主体性とは、自分自身の意志や判断に基づいて行動しようとする態度である。人は、地域、国家、世界など様々な社会の一員として、よりよい社会を作り上げるため、主体的に社会にかかわっていかねばならない。そのためには、周囲の社会や世界に関心をもち、情報を収集し、何が正しいか、何をすべきか適切に判断した上で、積極的に働きかけようとする態度が必要となる主体性を高めるために郷土は、生徒にとって親しんできた生活の場であり、興味・関心をもちやすい。郷土の事象は自分の生活に直接影響を与え、当事者意識をもちやすい。その郷土は日本や世界とのかかわり無しには、存在しえない。郷土を起点に世界をとらえることで、世界のことも実感をもって理解しやすく、かかわり方も主体的になると考える。

国際社会に主体的に生きることは、学習指導要領改訂の視点や社会科等の目標と重なる。国際社会に生きる公民的資質を身に付けることは社会科等の最終的なねらいである。

以上のことから、郷土教材を活用した学習を通して主体性が高められると考えた。

国際社会に生きる公民的資質を身に付けることは社会科等の最終的なねらいである。

以上のことから、郷土教材を活用した学習を通して主体性が高められると考えた。

### (2) 社会科等における主体性

社会科等で身に付ける必要のある、主体性にかかわる能力や態度を以下のように考えた。(表2)これらは、必ずしも段階的に身に付けるものではなく、何度も繰り返して学習し、高めていくものだと考える。年間を見通して、計画的に指導していく必要がある。

表2 社会科等で身に付ける主体性

- |                             |
|-----------------------------|
| ①社会に関心をもつ(関)                |
| ②社会的事象の中から問題を見つける(関)        |
| ③問題解決のための方策を考える(考)          |
| ④自分のできることから、社会に働きかけようとする(関) |
| ⑤郷土に対する愛情をもつ(関)             |

注：(関)－関心・意欲・態度，(考)－思考  
判断(表)－技能・表現，(知)知識・理解

### 3 情報機器を効果的に活用した授業の研究

#### (1) 普通教室等における情報機器の活用法

情報通信技術は著しい進歩を見せ、また学校教育においても特定の教科・領域で「コンピュータを教える」時代から、「いつでも、どこでも」情報機器等を駆使して情報を活用する力を育てることがより強く求められるようになり、市でも普通教室や特別教室のLAN整備が進められている。情報機器を効果的に活用した教科授業等の指導内容情報機器の効果的活用方法を考える。

#### (2) 各教科・領域における情報教育

情報機器を効果的に活用した授業法の目標は「情報活用能力の育成」にあり、それはすべての学年、すべての教科・領域において求められなければならない。「情報活用能力」とは昭和61年の「臨時教育審議会」第二次答申で「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」を指す用語として使われはじめ、定着してきた。情報活用能力は以下の3項目に分けられている。

##### ① 情報活用の実践力

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力。

##### ② 情報の科学的な理解

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解。

##### ③ 情報社会に参画する態度

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度。

(「情報教育の実践と学校の情報化」平成14年文部科学省より)

平成14年度から全面実施された学習指導要領では中学校技術科に必修として「情報とコンピュータ」の単元が新たに設けられた。上記①②③の3項目のうち、「情報の科学的な理解」については一部を除き技術科で扱われ、また、「情報社会に参画する態度」については技術科及び社会科で主に扱うこととされ、各教科・領域においては「情報活用の実践力」の育成を中心に扱うことになる。

#### (3) 普通教室における情報機器の活用

普通教室や特別教室にネットワークが整備されることにより、コンピュータ室の閉ざされた空間とは異なる様々な情報機器の活用が可能になると思われる。コンピュータ室はコンピュータリテラシーを取得したり、コンピュータグラフィックなどのようにコンピュータ操作を中心とした学習には適しているが、学習の一部で使用したり、話し合い活動などと組み合わせて使用する際、場面によってコンピュータの存在そのものが邪魔になることもあった。インターネットやイントラネットで結ばれた移動式のパソコンは、自由度が高くこれまでと違った形で学校現場での積極的な活用が期待できる。

〈想定される活用法〉

##### ① コンピュータとプロジェクターの組み合わせ使用

最も一般的で利用しやすい形態である。教科の学習において教師から資料・教材を提示したり、課題解決学習・体験学習などの報告会などで生徒がプレゼンテーション作成ソフトの「パワーポイント」等を使って発表に活用するなど、教科領域を問わず幅広く利用する。

##### ② 複数のコンピュータを使用

移動式パソコンの利点を生かした形態で、教台を、班別の課題解決学習や体験学習などで班ごとに新聞やポスター、レポート作成、資料収集などに利用したり、実験などのデータ処理に使うなど、様々な活用法がある。

##### ③ 学級を超えてネットワークを使用

双方向性の機能を持つ統合ソフトの「わいわ

いレコーダ」を利用して学級を超えて同一テーマで意見交換をしたり、イントラネットを利用して他の学校との共同学習を行ったり、さらにはメール機能を活用して資料収集や意見交換などに活用したりすることなど、「コンピュータを利用した共同学習」は、より展開しやすくなる。

④ データベース端末として使用

校内のファイルサーバに、生徒の学習資料や学習成果のデータベースを構築し、必要に応じて活用することが容易となる。

今回の実践授業では学級を越えてネットワーク使用を行い、わいわいレコーダーやコラボノートを活用した授業法を行う。

4 表現する能力と態度を育む授業の工夫

歴史教育では、その歴史的事象に対し生徒自身がそれまで獲得した歴史的事象や経験を根拠として、自分なりの価値判断を行う思考力を育てる学習活動が非常に重要であると考えられる。

(1) 考えて、表現する学習活動

社会科歴史的分野において、「思考力と表現力を育成する学習活動」にせまるための手だてを模索した結果、討論活動にたどりついた。

(図5参照)

討論活動とは、「ある事柄について対立軸を設定し、意見を出し合い、考えを深めていくこと」である。この活動は、ある歴史的事象について自分なりの価値判断を考え、それを表現しあう学習方法の一つであり、確かな知識、公正な判断力、多面的・多角的な思考力、豊かな表現力を身に付けるための有効な手だてである。

(図5参照)

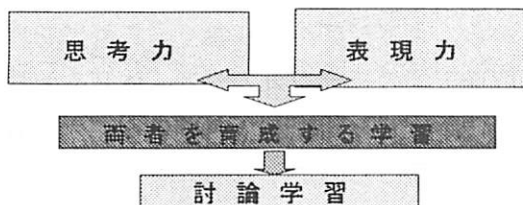


図5 思考力と表現力を育成する学習活動

(2) 思考し表現する能力と態度の育成

様々な歴史的事象に対し多面的・多角的な視点から自分の考えを持ち、表現することができる生徒は身近で切実な課題を設定し、そ

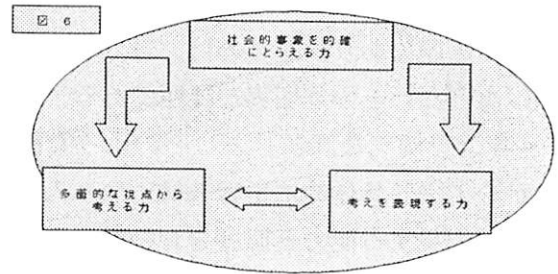


図6 思考し表現する能力育成の相関関係

の解決に向け自ら獲得した知識をもとに、様々な意見を参考にしながら自分の考えを表現する討論活動を実践すれば、歴史的事象に対しての多面的・多角的な思考力や、豊かな表現力が育つであろうと考える。(図7参照)

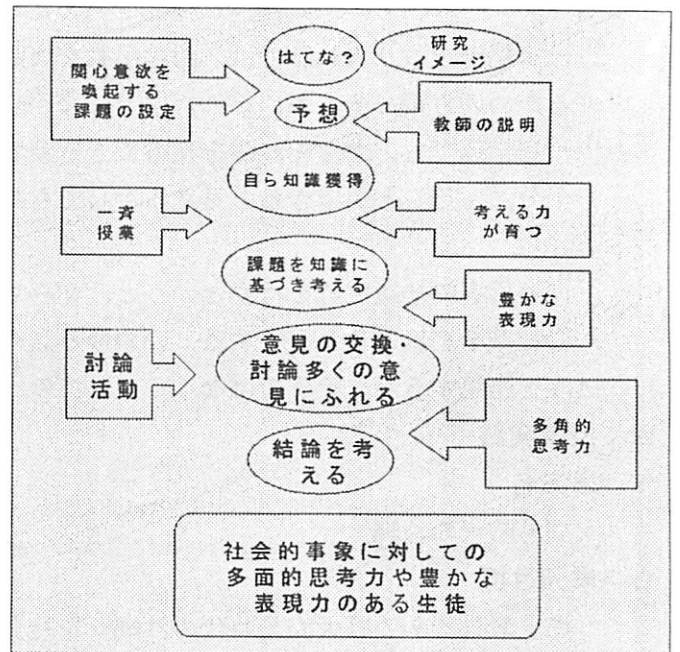


図7 歴史的事象に対しての多面的・多角的な思考力や、豊かな表現力育成の展開

① 「身近で切実な課題」

心理学者マズローの欲求階層説によれば、人間は本来自分の意見を発言し、他に認められたいという欲求をもっている。課題がそのような



欲求を喚起するものであれば、おとなしそうに見える中学生も、生き生きと自分の意見を表現することができるのではないか。考えてみたい、表現してみたいと感じさせる課題の条件は2つあると考える。

1 つめは、自分にとって身近に感じることのできる課題であり、2 つめは、自分で考えなければならないという切実な課題である。

「身近で切実な課題」とはどのような課題なのかを工夫し具体的に学習教材に取り入れ実践すれば表現する能力と態度を育む授業の工夫にせまることができると考えた。

## ② 「自己の獲得した知識」

討論課題に対する考えを生み出すためには、知識の定着が不可欠である。歴史教育における思考力とは、確かな知識に基づくものでなければならないからであり、生徒が知識を獲得していることが討論活動の前提となる。この討論活動に導く知識定着のための学習活動は、一斉指導やグループで行うことが適切であると考えた。

一斉指導を取り入れるのは、討論活動を実践するための方策であるが、それだけではない。

一斉指導でも、進んで知識を獲得できる環境を十分に作ることができると考えるからでもある。

一斉指導で知識定着を行うというと、やみくもに知識を定着させようとする、いわゆる詰め込みを連想するが、そうではなく、ここでの一

斉指導は、後に討論活動で自分の考えを組み立てるという明確な目的があるので、自ら知識を獲得しようという意欲が高まっている状態となる。そのような雰囲気を生徒との間に作る事ができれば、一斉指導にありがちな受け身の姿勢を防ぐことができ、なおかつ教師が主導となり確実な知識の定着が図れるのではないかと考える。

以上のことから、討論活動に導く一斉指導では、生徒が進んで知識を獲得し取り入れていく必要がある。

## ③ 「自分の考えを表現する討論活動」

多くの意見にふれる討論活動は、多面的・多角的な思考力を育てる上で有効な手だてとなりうる。異なる考えを持つ意見にふれることで、自分の考えを客観視でき、柔軟な思考力が鍛えられるからである。

また、討論活動は表現力を高めるためにも有効である。一般の調べ学習のスタイルで行われる発表活動でも、豊かな表現力を育てる手だてとなるが、また生徒がその場その場で瞬時に考えた意見を、生き生きと表現できるのが本当の表現力であり、それができるのが討論活動の良さであると考ええる。そのような活動にするために、討論活動では一斉授業後半にグループ学習を取り入れた討論活動を実践すれば表現する能力と態度を育む授業につながるできると考えた。

度を育てる。

(2) 見通しをもった計画的な学習の進め方や、課題を設けてそれを解決していく学習の進め方を身に付けさせるとともに、資料を自ら収集し活用する技能を育てる。

(3) 「大交易時代の沖繩」学習を通して得た成果から、東アジアを取り巻く国際情勢を理解し、琉球王国の統一や東アジアの体制や背景を理解し冊封体制やそれが与える王権への影響、諸国との交易について学習内容を理解させる。

(4) 「大交易時代の沖繩」の課題や疑問を解決し、

## Ⅶ 授業実践

### 1 単元名

「大交易時代の沖繩」

### 2 単元目標

郷土教材である「大交易時代の沖繩」を社会科副読教材とした、歴史学習を通じて我が国の歴史を地域の具体的な事柄との関わりの中で、情報機器を効果的に活用し興味、関心と主体性を高める。

(1) 身近な郷土教材の実物資料を活用した発表学習を通して、歴史的分野の学習に対する生徒の興味・関心を高め、主体的に学習に取り組む態

まとめ整理した成果を情報機器を効果的に活用し発表活動を通じて、評価し合い表現する能力と態度を育てる。

### 3 単元について

#### (1) 教材観

生徒の歴史についての興味・関心をより高めるために、身近な郷土を題材としたテーマと実物資料の活用が有効なことは言うまでもない。実物資料自体、生徒が歴史的対象に触れ、歴史上の人物と出会う場をつくるための案内板といえる。博物館、郷土資料などは、実物資料の宝庫であり、歴史学習に取り組む時に、ひとときわスケールの大きな学習の場になる。博物館などは、展示品の資料的価値や、その種類、数などにおいて、教室では望めないほどの豊富さがある。しかもそこは、見学・調査、まとめ、発表などの作業的、体験的な学習を行う事によって、生徒自身が主体的に学習を進める事のできる場ともなる。

今年、本県に沖縄県立博物館が設立された。展示技術も格段に向上した中で、休日に催しがさかんに行われるなど、質的な面でも大いに充実を見せ、さらに博物館側も、積極的に学校教育との連携を深めようとしている。これによって、博物館、郷土資料館などを学校における教科学習にも活用することが、より可能になっている。

そこで、具体的に沖縄県の「沖縄県立博物館美術館」で、社会科歴史的分野の身近な郷土をテーマにした学習を行い、そこを利用していく過程で興味・関心と主体性を高める学習をしていく。内容としては「大交易時代の沖縄」を社会科副読教材として取り上げた。「大交易時代の沖縄」については、博物館でもその関係の展示資料が豊富であって歴史的分野の学習に活用しやすく、また歴史学習の早い段階で博物館などの利用法を習得させておくことで興味・関心と主体性を高める学習の向上に役立つと考える。

第3章の武家政治と東アジア（琉球とアイヌ

がになう東アジアの交易)「イ独自の外交と貿易」に関連して琉球王国の成立の過程には、三山の勢力の時代があり、その頃の東アジアでは交易がおこなわれ中国を盟主として、国々を取り巻く、当時の情勢が混乱から統一に向かう中、冊封体制がしかれ、朝貢貿易や海禁政策などがしかれていくあらすじを捉えさせ、東南アジア、朝鮮、日本との交易の具体的内容や琉球の役割を琉球との関連の視点で捉えさせ理解さたる郷土教材学習である。

#### (2) 生徒観

男子17名、女子18名、合計35名である。5組は比較的明るく元気なクラスだが生徒は積極的意見が少ない。社会科に対する生徒の意識アンケート調査では、社会科に対する印象として暗記的学習だと捉えている生徒が多くいた。

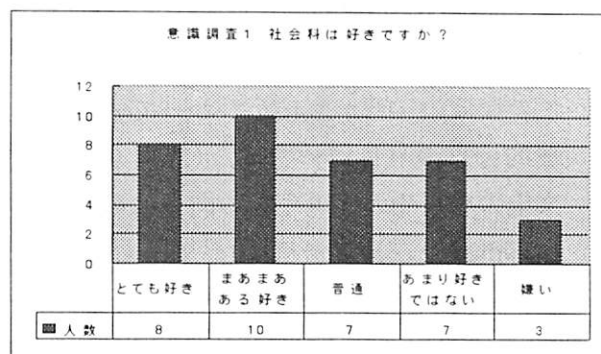


図8 意識調査「社会科は好きですか」

また、「社会科は好きですか」という質問に対して「とても好き」「まあまあ好き」と答えた生徒が、「普通」「あまり好きではない」「嫌い」と答えた生徒よりもわずかに多いだけで社会科は、生徒にとって「興味・関心」が低い傾向にあるように感じる。さらに、日々の授業実践から、生徒たちは学習活動において受動的にとらえている生徒も少なくない、それは「興味・関心」や学習力が高まらない一因となっている。

さらに「自ら進んで課題を調べ解決する事」や「資料の収集・処理・発表」が、あまり得意でない。

#### (3) 指導観

生徒の実態を踏まえながら、情報通信機器活用による双方向のゲストティーチャーや交流学习、共同作業体験を織り交ぜながら、教材を活用し、ソフト作成やプレゼンテーションを導入した作業的学習、共同作業による課題内容の発表、などを通じて興味・関心と主体性を高める学習や発表力を高める学習方向へ、郷土教材を活用して生徒を巻き込んでいくことがねらいである。

事前学習では、パワーポイントを活用したプレゼンテーションとテレビ電話等興味関心を持たせながら、博物館見学学習へつなぎ、事後学習では社会科副読教材を活用し同時にネット上に書き込みのできるソフトで作成し意見交換や発表評価し合うと共に表現する能力と態度を高める。

#### 4 指導計画(全9時間)

##### (1) 学習内容と指導要領とのかかわり

この領域の学習が直接かかわっているのは、歴史的分野の「目標」では、(2)国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史指導計画及び評価計画

上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる。」と、「4 具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め、様々な資料を活用して歴史的な事象を多角的に考察し公正に判断する能力と態度を育てる。」の二つである。

ここで取り上げる内容は、「内容」の(1)「単元：第3章武家政治と東アジア（ア琉球とアイヌがになう東アジアの交易）(イ独自の外交と貿易)」に関連した「大交易時代の沖縄」となる。また、「内容の取扱い」の(1)のウに、「身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに、民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの文化財の見学・調査を通じて、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること。」と示されていることにもかかわる。

第3章武家政治と東アジア（ア琉球とアイヌがになう東アジアの交易）(イ独自の外交と貿易)に関連した「大交易時代の沖縄」の班別の学習課題テーマを見学学習を通じて調べ課題解決した成果をまとめ発表をしていく。

構成	学習内容及び時数	形態	評価	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
事前学習の準備	見学学習・①調時査に向けての準備	オリエンテーション	A	地域の歴史に興味を持ち、主体的にテーマを追求することができる。	多様な情報を整理し、多面的・多角的に事実を関連づけることができる。	目的に応じた様々な方法で多様な情報を入手することができる。	学習方法や学習の概要を積極的に理解できる。
			B	地域の歴史に興味を持ち、調べることができる。	情報を整理し、事実を関連づけることができる。	目的に応じた情報をいくつか入手することができる。	学習方法や学習の概要を理解している。
			C	地域の歴史に興味を持ち、調べることができない。	情報を整理し、事実を関連づけることができない。	目的に応じた情報を入手する事ができない。	学習方法や学習の概要を理解していない。



東中朝 ア国鮮 ジとと アのの 交朝交 易貢易 圏貿, 易日 冊, 本 封東と と南の 王ア交 権ジ易 ②ア④ ③時	知 識 理 解 討 論 学 習	A	身近な地域に見られる 事物や事象に関心 をもち, 意欲的に調べ ることができる。	調べてみたい課題を意欲 的に引き出すことができ る。	興味をもった事物や 事象について積極的 に記録をとる事がで きる。	身近な地域に見られ る事物や事象をたく さん思い出すことが できる。
		B	身近な地域の事物や 事象に関心をもつこ ができる。	調べたい課題をもつこと ができる。	興味をもった事物や 事象について記録す る事ができる。	身近な地域に見られ る事物や事象をひと つ思い出すことがで きる。
		C	身近な地域の事物や 事象に関心をもつこ ができない。	調べたい課題をもつこと ができない。	興味をもった事物や 事象について記録す る事ができない。	身近な地域に見られ る事物や事象を思い 出すことができない。
見 学 学 習	沖 縄 県 立 博 物 館 見 学 学 習	A	見学調査や聞きとり 調査に関心をもち積 極的に参加しようと し, マナーも守る。	文献調査と見学調査を通 じて得た情報の結びつき や違いを明確にできる。	見学調査や聞きとり で得た情報を工夫し て記録できる。	見学調査や聞きとり 調査の意義について 理解し, 自分の言葉 で表現する。
		B	見学調査や聞きとり 調査にマナーを守り, 参加できる。	文献調査と見学調査の情 報を合わせて考えること ができる。	見学調査や聞きとり 調査を記録すること ができる。	見学調査や聞きとり 調査の意義が理解で きる。
		C	見学調査や聞きとり調 査にマナーを守れず参 加できない。	文献調査と見学調査の情 報を合わせて考えること ができない。	見学調査や聞きとり 調査を記録すること ができない。	見学調査や聞きとり 調査の意義が理解で きない。
事 後 学 習	調 べ 討 論 作 成	A	情報入手の方法として インターネットを利用 したり, 身近な地域資料 社会科副読教材に関心 をもち, 進んで活用す ることができる。	学習課題に即して必要な 情報のありかを明確に し, 適切な情報を選択で きる。	自分で身近な地域資 料の社会科副読教材 等から, 情報を集め ることができる。	情報収集の対象と方 法をいくつか覚える ことができる。
		作 業	インターネットや身 近な地域資料の社会科	学習課題に即した情報を 周りからのアドバイスを	アドバイスをを受け, 身近な地域資料の社	情報収集の対象と方 法をひとつ覚えるこ

発毎活 表の動 に準2	B	副読教材を活用することが できる。	受け選択できる。	会科副読教材等から 情報を集めることが できる。	とができる。	
	C	インターネットや身 な地域資料の社会科 副読教材を活用するこ とができない。	学習課題に即した情報を 周りからのアドバイスを 受けて選択できない。	アドバイスを受け、 身近な地域資料の社 会科副読教材等から 情報を集めることが できない。	情報収集の対象と方 法を覚えることがで きない。	
各班発 クか表 ラら⑧ スの時 各	発表 表	A	自分たちが調べ明ら かにした内容を積極 的にまとめ発表する ことができる。	発表内容について解釈、 とその根拠となる事実を 区別し発表できる。	発表をソフトを工夫 して行うことができ る。	作品のまとめ方や内 容、ソフトの種類と 特性を理解している。
各らの クのま ラ発と ス表め 各と⑨ 班全時 か体	現 評 価	B	自分たちが調べ明ら かにした内容を発表 することができる。	自分なりの意見を交えた 発表ができる。	アドバイスを得て、 ソフトを利用し発表 ができる。	作品のまとめ方や内 容を理解している。
		C	自分たちが調べ明ら かにした内容を発表 する事ができない。	自分なりの意見を交えた 発表ができない。	アドバイスを得てソ フトを利用した発表 ができない。	作品のまとめ方や内 容を理解していない。

## 5 本時の指導（全9時間中9時間目）

### (1) 目標

- ① 身近な郷土をテーマにした「大交易時代の沖縄」の実物資料を活用した交流発表学習を通して、歴史学習に対する生徒の興味・関心を高め、意欲的、主体的に学習に取り組む態度を育てる。
- ② 計画的な学習の進め方や、課題を設けてそれを解決していく学習の進め方を身に付けさせるとともに、様々な資料を自ら収集し情報機器を効果的に活用する学習や技能を育てる。
- ③ 「大交易時代の沖縄」学習での課題や知識内容を様々な模型や遺物の資料を活用した交流発表活動を通じて、多面的・多角的に考察し実感的に理解させる。
- ④ 身近な地域の歴史に対する興味関心を高めさせ、史跡や文化を尊重する態度と共に、学び合

い、表現する能力と態度を育てる。

### (2) 授業仮説

- ① 郷土教材（大交易時代の沖縄）の活用による学習の効果から興味・関心や主体性が高まり学習の理解が高まるであろう。
- ② 発表活動で課題テーマをまとめ整理し、内容を互いに発表し、評価し合うことで、理解が深まり、主体性が高まるであろう。
- ③ 効果的に情報機器を活用して写真、資料などを適切に選択・工夫した発表活動によって、興味・関心が高まり、主体的に表現する能力や発表態度を身につけ課題を解決していくであろう。

### (3) 準備物

プロジェクター パソコン スクリーン 延長コンセント 生徒ファイル 相互評価ワークシート アンケート用紙 ホワイトボード マグネットシート webカメラ

(4) (本時の展開)  
事後学習の第9時「各班からの発表とまとめ」

○グループ アークス理論本時 (s)

時間	学習内容及び学習活動 (生徒の活動)	教師の支援及び指導上の留意点	授業形態	ARCS理論	評価
導入5分	<p>I 今日の学習内容の主旨を確認する。</p> <p>① テレビ電話で両クラスの発表と今日の学習内容を聞く。 発表内容の具体的手順に従い発表する。</p>	<p>発表の具体的手順を示す。 (各班各係の役割分担と評価基準に従い発表するように導く)</p> <p>(5組から3組にスカイプで電話をかける) わいわいレコーダーボードの班毎のボードを事前に準備し 班別, 名前, パスワードを入力させて発表に入る。</p> <p>マグネットシートで発表の項目内容を示す。</p>	○	a	5 ① 5 ③
展開35分	<p>II 各班の発表クラス間班別発表意見交換</p> <p>① 班ごとに調査, 考察し作成した成果を発表し合う。 各班の内容をクラス間で発表する。 三つの班が発表する</p> <p>② 相互評価用紙を準備しながら各クラス班毎の発表をお互いに評価し合う。  発表のよい点や工夫している点を上げる。</p> <p>③ 発表後各班ともシート用紙に発表のよい点工夫している点などを書く。</p> <p>各班の記入したシート用紙の内容を聞き発表内容のよい点工夫している点などを学ぶ。</p>	<p>・ 質疑応答を奨励し, 各自が大交易時代の人々の生活の様子を, 全体像としてつかめるようにしていく。</p> <p>・ 教室でのコンピュータやソフト (わいわいレコーダー) を活用しテレビ電話でクラス間の交流学习とうまく結び付けながらまとめ発表させる。</p> <p>・ 聞く態度を指導し相手のクラス班の発表内容を評価し会えるように導く。</p> <p>相互評価用紙を配布する。</p> <p>・ 発表後各班にシート用紙を配り発表のよい点, 工夫している点などを示す</p> <p>シート用紙の内容を取り上げ, よい点や工夫されている点などを紹介する。</p>	○	c  r	5 ① 5 ② 5 ③  r
まとめ10分	<p>III 学習全体のまとめ</p> <p>① 先生のまとめを聞き, 学習全体のまとめと成果を振り返る。</p> <p>IV 学習の反省</p> <p>① 事後の意識調査アンケート用紙に記入する。</p>	<p>* 取組みの意欲, 博物館での調査内容の生かし方, 発表内容の分かりやすさ, などを総合的に評価し, 優れた成果についてはそれを指摘し, 各班に指導, 助言を与える。</p> <p>・ 大交易時代の沖縄の全体を理解しようとする観点から, 生徒の作った資料を活用して, 各班のポイントなどを整理する。</p> <p>* まとめた拡大用紙を準備しておき提示しながら説明まとめをする。</p> <p>・ 大交易時代の沖縄に関して現在発掘されている考古資料からだけでは, その時代全体を把握するには限界があることも着目させる。</p>	○	c  s	5  ③

(5) 評価

- ① 班員と協力して調査内容のまとめや発表活動を基準内容にそってできたか
- ② 興味関心を持って活動に主体的に取り組み自己の役割や分担を果たせたか
- ③ 班員と協力して発表活動ができ, 学習の理解や聞く態度は十分できたか



## Ⅷ 研究の考察

### 1 作業仮説1の検証

情報通信機器活用による双方向のゲストティーチャーや交流学习による対人的臨場感を視覚効果で感じるにより、学習への「興味・関心」が高まるであろう。

#### (1) 手だて

上の仮説を検証するために、郷土教材を活用した授業の中に情報機器を効果的に取り入れた。

その方法として、①テレビ電話でのゲスト出演②クラス別班活動でテレビソフトを併用した情報機器を効果的に活用した交流学习③動機付けとしてアークス理論を取り入れ授業を取り入れ実践した。

この一連の授業展開において、上記の仮説が検証できると考える。

#### (2) 結果

##### ①アンケート調査結果より

テレビ電話を学習に取り入れ大交易時代の沖縄についての概要を興味関心を引くように説明した。「わいわいレコーダーソフト」の活用により、互いの学習内容を作業活動を通して理解していく授業を行った。

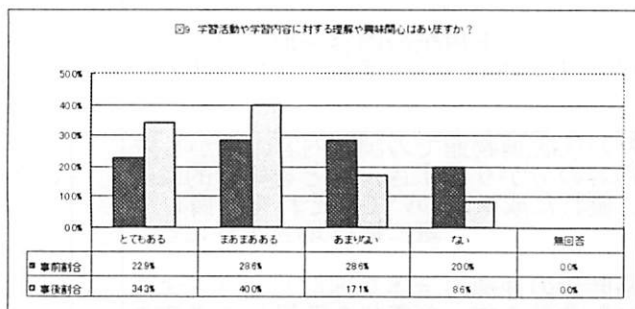


図9 ア「学習活動や学習内容に対する理解や興味関心はある方ですか」(事前事後の比較)

#### (結果)

最初に図9の「学習の活動や内容についての理解や興味関心について」事前事後を比較すると大きな変化は事後になると「とてもある」「まあまあある」を加えると51.7%から74.3%と高

くなっている。「あまりない」「ない」を加えると48.6%から25.7%と減少していて理解や興味関心が高まったことがわかる。

別のアンケート項目「ソフトを活用操作した課題解決学習において興味関心は高まりましたか？」の質問に対し「はい」が42.9%を占め多数である。「まあまあある」が31.4%、「あまりない」が14.3%で少数である。

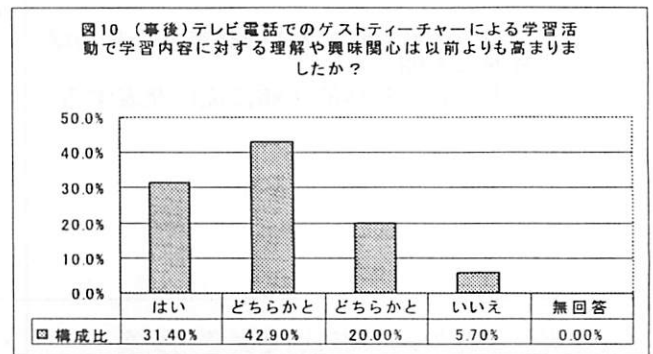


図10 イ「テレビ電話でのゲストティーチャーによる学習活動で学習内容に対する理解や興味関心は以前よりも高まりましたか」

#### (結果)

事後図10では「はい」「まあまあある」を加えると74.3%となっていてソフト活用が効果的であったことがわかった。

相変わらず「いいえ」の生徒もいるが学習活動や内容について、テレビ電話でのゲストティーチャーによる学習効果で興味関心から理解に結びつくようになってきたと思われる。

この意識変化は機器活用の効果が影響しているものと思われるが、具体的には考察のところで生徒の理由等を述べてみたい。

いずれにせよ、テレビ電話でゲストティーチャーによる学習活動を取り入れ考えさせる事は、「学習内容に興味関心を高める」上で有効であると思われる。

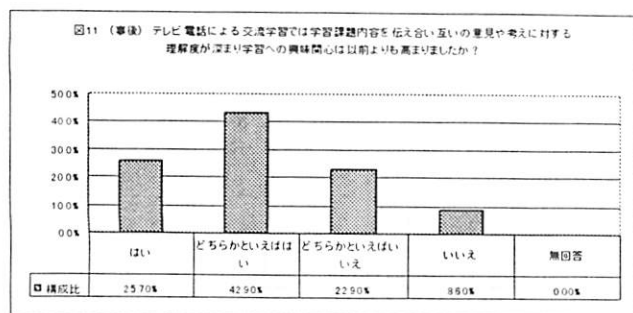


図11 ウ「テレビ電話による交流学習では学習課題内容を伝え合い、互いの意見や考えに対する理解が深まり学習への興味関心は以前よりも高まりましたか」

(結果)

図11を見ると「いいえ」8.6%へ、「どちらかといえばいいえ」22.9%へ減少し、「どちらかといえばはい」42.9%へと増加している。

徐々に交流学習での理解度や興味関心が高まってきたことを意味する。

全体的にプラスの成果が現れていると思うが、図11「いいえ」の生徒が8.6%いることが気掛りである。

### (3) 考察

図9の事前と事後の比較により、事後になると「あまりない」が28.6%から17.1%へ減少し、「ない」が20.0%から8.6%に減少した分が「とてもある」22.9%から34.3%へと増加し「まあまあある」も28.6%から40.0%に転じている。

このことから情報機器を効果的に授業に活用した結果として、興味関心を示しているものと思われる。

元々、「とてもある」と答えた生徒が22.9%もいて、その理由は「歴史が好きだ」と積極的な生徒たちであり情報機器を活用した授業では「話はするかもしれないけど多くの質問ができる」、「みんなの考えが聞ける」、「いろいろ話し合える」、「分らないところを聞けたり教え合える」、「おもしろい」多くの考えがあり楽しい」等の意見もある。

「まあまあある」の理由は「使用しなくてもできるから」、「集中とやる気があれば大丈夫」等

の意見もある。

以上の事を踏まえて、情報機器を効果的に活用した授業はより効果的な学習形態の一つであり、事後になるとこの取り組みの成果が、より加速度的に現れてくることが予想される。

図10において、「はい」項目の理由は、テレビの双方向性から臨場感を感じたり、自分でわからない所を聞くと教えてくれたから、「話し合いの中でさまざまな意見や考えなどを学び合える」「いろいろな意見が聞け討論し考えが広がる」「どちらかといえばはい」の理由は「意見を言い合って、相手の意見を理解できた」「分からない事は班の人に聞いたりして、教え合えたから学び合う事ができた」など、意見や考えの交流効果による考えの多様性が見える。

一人では解決できないけれど、班員の力を合わせて解決するような課題を設定しその課題の解決を通して討論し調べる過程で、生徒各自の中で「興味関心が高まる授業」へと発展していくと思われる。

それは「各自がいろいろな意見を出し合う」、「グループになって課題を解決する」、「自分の知らない意見や考えが分るようになる」と興味関心が高まり頑張ろうと思える」「互いに話し合いをしたり、情報機器を活用した交流学習」から推察できる。

図11におけるプラスの変容は明瞭に確認することができる。課題は8.6%近い生徒が「いいえ」と答えている。対策を立て解決を図っていきたい。

生徒が相互に、「伝え合い意見や考えに対する理解度を高める」事はテレビ電話でのゲストティーチャーや交流学習がより効果的であり興味関心を高めることが読み取れる。

## 2 作業仮説 2 の検証

情報機器を活用した「資料収集や処理」を取り入れ、共同作業体験を織り交ぜながら、教材を活用し、新聞作成やプレゼンテーションを導入した作業的学習で主体性が高まるであろう。

(1) 手だて

生徒に興味・関心を持たせながら、自ら進んで主体性を高める、「資料収集や処理」活動を取り入れた授業となるような手だてとして情報機器を効果的に活用した授業内容の展開を検証する。

グループで情報機器を効果的に活用し、資料収集、処理活用を行い主体性を高めること。

グループで情報機器を効果的に活用し新聞作成やプレゼンテーションを取り入れることにより主体性が高まること。

(2) 結果

① アンケート調査より

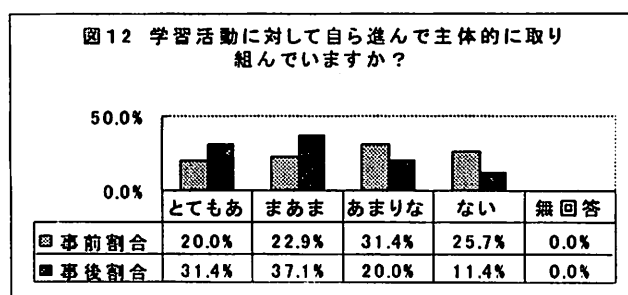


図12 ア「学習活動に対して自ら進んで主体的に取り組んでいますか」(事前事後の比較)

(結果)

図12の事前事後の比較から主体的に取り組んでいますかとの質問に対して事前「ない」25.7%事前「あまりない」31.4%から事後「ない」11.4%「あまりない」20.0%と共に減少しているのに対して事前「とてもある」20.0%「まあまあある」22.9%から事後「とてもある」31.4%「まあまあある」が37.1%と共に主体性の高まりを肯定する意見が増加している。

事前では「あまりない」が頂点であるのに対し事後は「まあまあある」を頂点とした型を形成している。

しかし事後「ない」も少ないが存在しているのでその対策が必要である。

図12の比較から、生徒にとって全体的に学習活動に対しての主体性が高まった事が数値から読

み取れる。

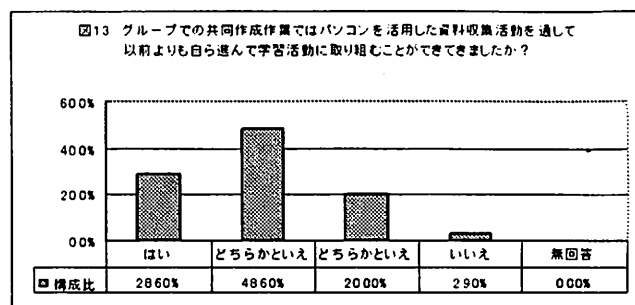


図13 イ「グループでの共同作業体験ではパソコンを活用した資料収集活動を通して以前よりも自ら進んで学習活動に取り組むことができましたか」

(結果)

図13からグループでの共同作業体験でパソコンを活用した資料収集活動を通して自ら進んで学習活動に取り組むことができましたかとの質問に対して、図12との比較から共同作成作業でのパソコン活用による資料収集活動を取り入れた学習活動では、事前図12「とてもある」20.0%から事後図13「はい」28.6%に増加、また事前図12「まあまあある」22.9%から事後図13「どちらかといえはい」48.6%に増加している。

また事前図12「ない」25.7%「あまりない」31.4%から事後図13「いいえ」2.9%「どちらかといえはいいいえ」20.0%に減少している事から主体性が高まってきたことが読み取れる。

博物館見学学習による郷土教材「大交易時代の沖縄」をわいわいレコーダーソフトを活用して事後4コーナー構成で作成した「社会科副読教材」を使用作成活用していく学習活動の中でグループでの共同作業で資料収集活動を通して自ら進んで学習活動に取り組むことができましたかとの質問に対して、それぞれ「はい」28.6%「どちらかといえはい」48.6%、「どちらかといえはいいいえ」20.0%「いいえ」2.9%である。

授業では「いいえ」「どちらかといえはいいいえ」「はい」「どちらかといえはい」の順で



数値が高い。

グループでの共同作成作業でパソコン活用による資料収集活動をした授業では、そうでないときの事前図 12 の図との比較で活用効果が顕著である。

すなわち共同作成作業でのパソコン活用による資料収集活動を通した学習では主体性を高める効果が読み取れる。

### (3) 考察

図 13 において、「どちらかといえばはい」「はい」理由として、「博物館を利用した班毎の見学学習による資料の収集や活用」「パソコンソフトの社会科副読教材「大交易時代の沖縄」の提示用ページ、調べ学習ページ、交流のページ、まとめと発表のページ、の使用作成活用「発表におけるテレビ電話やプレゼンテーションの作成活用操作」等、グループでの共同作成作業を通して「楽しく内容を検索できる」、「色が付いていて作成が楽しい」「いろんな資料が豊富で探しやすい、分かりやすく見やすい」「歴史の絵や資料を活用し編集できるし、分かりやすい」などの意見をあげている。

すなわち、写真・図・資料等を活用した授業は、生徒の興味・関心を呼び起こし、授業の理解を高めさせ、主体性を高める授業へと発展していくものと思われる。

よって図 13 からグループでの共同作業体験でパソコンを活用した資料収集活動を通して自ら進んで学習活動に取り組むことは学習活動における主体性を高めることが認められる。

### 3 作業仮説 3 の検証

共同作業による課題内容の発表を通して、互いの考えを理解し、表現する能力と態度を身につけられるであろう。

#### (1) 手だて

生徒にグループや共同作業による課題を、テレビ電話による、クラス間班別交流学習を通した、発表活動でお互いの意見や考えを、発表評

価理解し合い、表現する能力と態度を身につけられる授業となるような手だてを実践した。

二つに分けて考えてみると次のようになる。学習活動の中で発表する活動や態度を身につけること。

発表活動の中でお互いの意見や考えの理解が高まること。

#### (2) 結果

##### ① アンケート調査より

ア「学習活動の中で発表することや発表する態度などは身につけていますか」

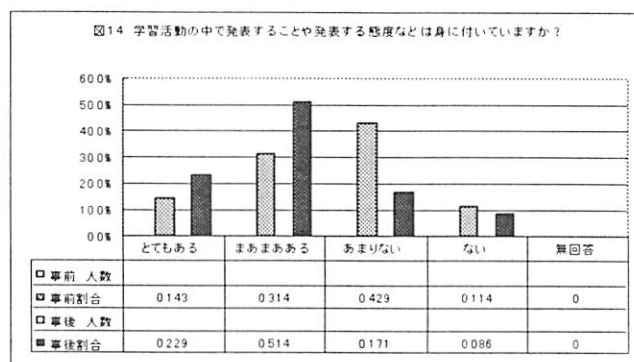


図14 ア「学習活動の中で発表することや発表する態度などは身につけていますか」

#### (結果)

#### (事前事後の比較)

「学習活動の中で発表することや発表する態度などは身につけていますか」の質問に対しての事前事後の比較図 14 データから事前「とてもある」14.3%から事後「とてもある」22.9%に増加している。

それぞれ事前「まあまあある」31.4%から事後「まあまあある」51.4%事前「あまりない」42.9%事前「とてもある」14.3%から事後「とてもある」22.9%に増加している。

「あまりない」を頂点とした型から「まあまあある」を頂点とした型に変化していることから学習活動の中で発表することや発表する態度などが身につけてきたことが認められる。

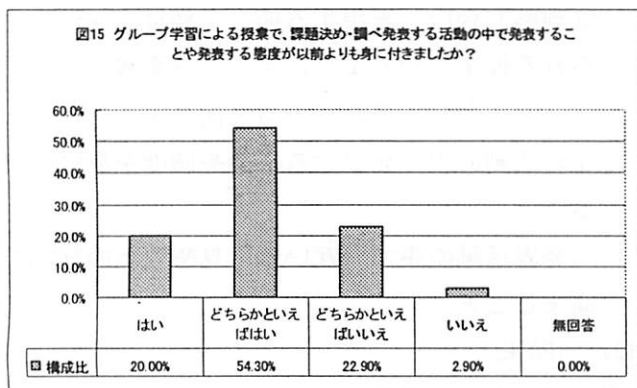


図15 イ「グループ学習による授業で課題決め調べ発表することや発表する態度が以前よりも身に付きましたか」

(結果)

事後図15のデータのから、「はい」が20.0%事後「どちらかといえばはい」が54.3%に「どちらかといえばいいえ」22.9%に大きく増加している。

どちらかといえばいいえ」が頂点の形になった。

このことからグループ学習による授業で課題決め・調べ発表することや発表する態度が以前よりも身に付いたことが認められる。

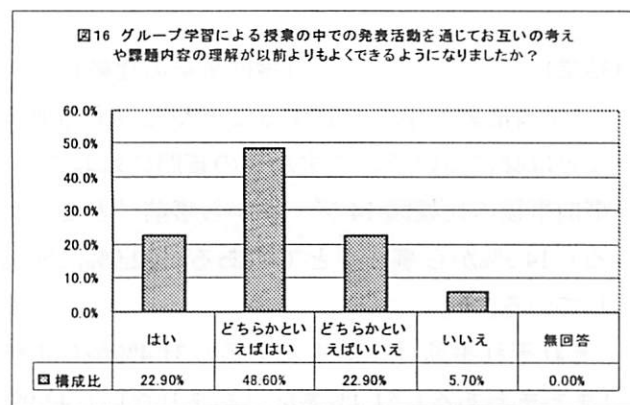


図16 ウ「グループ学習による授業の中で発表活動を通じてお互いの考えや課題内容の理解が以前よりもよく理解できるようになりましたか」

(結果)

図16では「はい」「どちらかといえばはい」はどちらも増加し「どちらかといえばいいえ」「いいえ」は両方とも減少しているこのことから「楽しく他のクラスの意見や考えを聞け

たり伝えたりすることは学習への理解度へつながっていく」また「発表する内容をいかに充実した内容にするかによって、発表自体の正否が決まることを学んだ」また他のクラスの発表を聞き評価することで、自己の発表における声の大きさや内容の関連性などに気づくことができる。

気になるのは「いいえ」がいることである。その理由として、慣れているために戸惑っているためと思われる。

場を重ねることにより、工夫改善が生まれより充実した発表する能力や態度が身につけていくことが予想される。

### (3) 考察

図14における事前事後の比較から「とてもある」「まあまあある」が増加した理由として、テレビ電話でのゲストティーチャーやクラス間交流学習がより効果的に興味関心を高めたことは、生徒の発表活動の中で、「相互に、伝え合い意見や考えに対する理解度を高める」ことにつながっていくことが読み取れる。

また「発表する事によって自信がわく」「発表するときは自分の意見をみんなに知ってもらえるし、みんなの意見も聞けるから、いろいろな考えができるようになると思う」「発表は緊張するけど、意見や考えを言える力が付いてくると思う」「答えが当たっているときは嬉しい」などである。

このような思いをいだいて、日常の学習活動に取り組み実践することで、少しずつ発表する能力や態度を身につけていく事が予想される。

## IX 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

- (1) ARCSモデルを適用したweb版社会科副教材を活用した授業を行うことにより、生徒の学習意欲を高める事が出来た。
- (2) 様々な情報機器の活用やグループ学習を取り入れることにより、生徒の歴史学習に対する興味関心や主体性を高めることが出来た。
- (3) 討論活動や調べ学習を授業に取り入れるこ

とにより、表現する能力と態度が向上した。

## 2 研究の課題

- (1) 機器の不具合や台数確保、機器操作の個人差などの問題。
- (2) 主体性を数値化する方法。
- (3) 発表に対して消極的な生徒に対する手だて。
- (4) 討論発表活動のさらなる工夫。

### 【終わりに】

日々の授業の展開について、どのような視点や手だてで、どんな理論構成で進め行けばいいのか模索しながら課題を抱え解決の糸口を見いだしたく入所した中、幸いにも何とかめどを立てることができてほっとしている。

今後は、日々研鑽しながら根気強く生徒とともに研究を続けて行きたい。

研修期間中、多岐にわたり指導、助言を頂い

た研究所の宮城むつみ所長、石川博基係長、比嘉清喜指導主事をはじめ、職員の皆様に深く感謝申し上げます。

また、助言や温かい励ましの言葉を頂いた浦添市教育委員会の諸先生方、特に川村和久指導課長、奥間恭順指導係長の先生には、検証授業等における示唆を与える御指導と温かい励まし心より感謝申し上げます。

また、仲西中学校の知名道博校長をはじめ、職員の先生方にも心より感謝申し上げます。

最後に、半年間研究を共にした先生方にも心より感謝申し上げます。

和気あいあいとした雰囲気の中、学び合う事ができたことを嬉しく思います。

皆様、本当にありがとうございました。

### 【主な参考・引用文献】

- ・『中学校学習指導要領(平成10年12月)』解説 一 社会編 文科省
- ・『高等学校琉球・沖縄の歴史と文化』新城俊昭
- ・『高等学校琉球・沖縄史』新城俊昭
- ・佐伯絆, 荻宿俊文:インターネット学習をどう支援するか, 岩波書店, 2000
- ・鈴木克明:教材設計マニュアル, 北大路書房, 2002
- ・文部科学省『情報教育の実践と学校の情報化～新情報教育に関する手引～』(平成14年6月)
- ・文部科学省「校内ネットワーク活用ガイドブック」(平成15年3月)
- ・歴史教育者協議会編(2002)「歴史の討論授業の進め方」国土社
- ・研究紀要40 課題研究プロジェクト報告 伊勢市教育研究所